燕石十種

遊女吉野傳

六輯

七

679
60

特
14
679
60

宗像氏
小倉文庫
図書

吉野傳の事一書

かくらの院の御ものがたりの事一段やの御ものがたり
のおもてのみことや歌ものみやびをさつのまろ〻ぢ世の
人ふさ〻を形〻〻遠き所にて書をかきてふ
しておのれふけ重をつひおさへられたりし見る
みまつりおもへんらきな此の歌をかくしてかの
ものがたりの歌びのうへをやかくれたる形ん先つら
かふおもしきかりの等しんの御歌の中ふるの名言く間
元〻ものを形ふ水の中ふ方はみ形ふ先ふ歌のかりふ行ふね
みよりてだに出てさて絶ぢんにて行ふもし物の世を大
うをれものつひみやひやふ形しかを今のやふふ歌のむ
さつをかうにて出てれを松をたくべ一やハ此
ふ一世をつひ一を方のかりをあらにかをんを立てを

[illegible]

吉備乃山人藤井高尚

中さんみやさうふ[illegible]

文化九申年

都さま加茂の庸人
経邦

一　北陸の道延寶の頃本多道太經を本堂として餘なし

一　冊子の中に具足ふかきを其原本のまゝ出せり

順名ふ諱名をつゝるを右大經の作者の製造なるを

して全名のいまゝ作るかゝるかゝ作人をつゝたんて形ら

又初のつゝ字の名のたゝるを其まゝ用ひたるを

ゆるさんん

因ふ云北書の作者冊軒巢山八都近邊の人姓藤

本中略を島山其先上総介原茶子の遠裔にて

因又猪爾と号す北人壮年の時より六十餘州の

廊を歩行して風俗を窺ひ年を積て

三千を餘毎ゆして士經十八巻を撰ミたるゆゑ自ら

凡例ふたるもの今其書を逐て万打ふ作ふの

ゆ

吉野傳

遊女吉野実の名を徳子祖父を藤原の秀郷の末裔

ゆ我慶長の比都を節の辺ふうまれぬまゝ山ゆ市

ゆ比ゆ寛永六年三月朔日の郭林行の町形ふ

ゆ比ゆ小ゆて童名をゝ林原ゆ山ひき一ゆ出雲の

の守さゝれ相を見給ひて家ゆ一ふのゝまゆ

形ゝ形ゝ形ゝ水ふ たゝよ形ゝ名を白の本ふ

うゝへき おあゝゆを ゝん給ひ一ゝ ゝけふ れのすけて元の

ゆふ形ゝふあゝ ゝけ形ゝて萬のをのゝ ゝゝ

形ゝゝ 長氏もゝ ゝまて ゝき ゝ元ゝゝ人ゝ ゝ

羅山林氏都ふ徳子ゆ 形ゆ形ん ゝ一 ゝ一の妙西形

ふ高ゝ ゝ形ゆ形ゝ ゝこよ形ゝ ゝれ形ゝ ゝこ ゝ

ふけつゝて ゝゝ ゝたゝ ゝたゝ ゝの情ゝ ゝゝ

[illegible]

二条殿御北女の長男にて又二郎と
いふ長男は六条ゟ今の郭へ移り寛
五年家督御相続す

時代詳ならず上総高名の北女今按ず
るに天正慶長の比の生歟の郭の北女
歟なるべしか

六条郭上総の北女コレヨリ上総又
九三ノ項ニ通殺ス 元名
林作肥前守と云る天孫ふたりの内にて元

林出雲守家

元祖 吉 賀 諱禎子
同 家
二代

吉 賀 諱德子
三代 吉 賀 同家 諱恰子

○喜多八左衛門家
初代 吉 賀 諱雄子
二代 吉 賀 諱雪子
同 家
三代 吉 賀 諱登子

初五年七月出世寛永八年八月退郭
其後の五十三年六条にて七人の内先後
記せざる也歟

時代詳ならず坤郭より島原乱後の
北女なるべしか今按ずるに正保慶安の北女歟
らん

上ノ町

六条郭上総の北女寛永十七年出世
於坤郭移り正保三年退郭
坤郭天孫の北女明暦三年出世始天孫
又延宝三年家督寛文三年死すまで
原幸の上総にて其後にて者歟

坤郭上総の北女元名三弥延宝三年
出世始まる其後高名の内にて
定歟 一四巳の年に病の死にて
二代吉賀にて おもんから此婦なるか

田中喜三郎家
吉野謙孫

高田七郎右衛門家
[illegible]謙学

伊藤吉右衛門家
吉野謙孫

宮島[illegible]三郎右衛門家
吉野謙悦

中ノ町
時代詳ニシテ坤鄭藤ノ娘女[illegible]
[illegible]ノ娘ナリ[illegible]四保四年高田家ニ移ル
[illegible]

坤鄭[illegible]ノ娘女[illegible]ノ娘
[illegible]四保四年高田家ニ移ル

柏屋ト云 上町
時代詳ニシテ坤鄭ノ娘ノ娘
[illegible]

大光町
坤鄭[illegible]ノ娘女[illegible]
十[illegible]年出世

[illegible]

卷之十七 扶桑列女傳 云吉野謙德子姓藤原松田氏
曩祖出於藤太秀郷 後陽成院御宇慶長十一年
丙午三月三日生諸陽大佛 自七歳之秋被養林氏子次
兵衛之家而役益子耶前秀名林弥耶前不深憐愍
德子而家主労而令退之其後不意從失輩矣于時雲
州大守視之告家主曰童女林弥有奇異相必發名
於日域最可為上職依此言元和五年巳未五月五日
出世而補太夫職 于時德子十四 名曰吉楚自是先有此名
依為高名号之德子性輕爽而智恵甚深冥艶而心法
然恣気且下情有要焉德子聽者得妙亦常好酒能遊事
言語奪人心在郭内高德威儀其繁数無指頭諸衆名
相而已有大明國吳興李湘山者梦中會吉楚二通言墓

這邂逅而以寛永四年丁卯秋八月賦詩而送扶桑其詩曰

日本曾聞芳埜名夢中髣髴賞獨驚清客未見況
無極宣向東海叢鷹行
又翌年自漢土請德子壽像我朝之遊客識焉而命畫工
令畫之跪德子之自前后雖貌畫工尊其暉相而不採毛
延壽之例皆畫如七影不違顏色恰如移影鏡悉附軸
為七幅而遣九州異朝商人代綴羅而獻喜影況於侍人
乎衆人見金峰山之花者忍松氏姿訝神振山之月者思
德子而影矣實永第八霜就鹿客而有訴論因茲無不
充年季同年八月十日年二十六而還舊里
箕山之評云噫吁德之感天下也大至乎哉吉野流
義名于中華令見雅之士恨冊戶何必在色耶吉

国唱名異域者載書史而今不足贅天正而未羅浮
子道春達名大明法所子道四檀文詩名于海外
吉野可与二賢並駐矣惜哉使司馬氏在必採
載女史之傳
吉野の世ハ九ツ程の世ハ九ツ程ハ同一書の寛
文拾四式て山巻半ハ云略六条の時ハ女六人の大嘗会の
りりさ程きたハ三の時の上職ハ荘厳常ハ四ツ程ハ
ハ四ツ程の程ハ北日ハ三ハ程の者程ハ九ハ元嘗
を段ハ程ハ弥備をハ半ハ元ハ元ハ元ハ元ハ
ハハ安養寺ハ異程ハ程ハ程ハ程ハ程ハ程ハ
出ハ程ハ一ハ程ハ半ハ晩ハ元ハ元ハ元ハ程ハ
まりておきすきハハさらは元ハ程ハ程ハ
ハ使をたて一ハ同をさまハハハハハハ

る神人まつる形代は漢水にて年に二たび禰宜これ智山にて流
て出雲の白妙の肌着に背守形に男きもの山たつかにね紫の
るし帶をまきたりし出つるは數奇者廊に女郎をこしらへて
琵琶ふ着る翁か野の感しられて志たらく挨拶をきかせて
ゐるありや其座におもしろき歴ての風方事にゐさらせ
ならひはまて書つき侍るに採要私に云入り接出るを此比
の古文段に見るの先達形ある所にかの甚人をそへしひに
すゝおもしろくて世にあめしきにはの婆姫をそへて此頃にて形を
すゝみ 今様に形は三者の上首を古文に入るは元和の此よりの祢形を手比六条と佐渡島
庄右衛門が形にして注ありて申樂の能を形にする事中に藝の操形にかかる者をさせて
高ようひしおりう半比見又猿にもやひりてさもしろかりたるを
百人のゆかりを十人と人をかゝ書えるを学て程形よりむかしの古文は今いまさかしく残されたるおの
つかひをよしうしておもしろに化粧せすまれしく化粧させるを品ととく
りたる拾女形の形へさるに此者の座ならる拾ひ出てのさまかく
心つくひしたる図居の出しるにつくろひぬ婆の山にて氣ちぬの花

みつ栄をつゞりしたるひ形きぬにも形ぞみ先に岡田子伴ゆくし
續曠人形を手業せし時此拾ひの傳を載す甚中に雛形
のきものこ吉野に鮎あるしてつゐに其いをとけて淨西川に流して
殺せしたちをよりたるこ八西鶴か作にれる好色一代男（天和二年板本櫻偏）
（西吟ら讃作）てふたまれ生て見ゆ（諸の名代好色丹子形をとうに云り）都をとり花形を呈て
おしなし吉野なる花の年の山ふうつして見る武人のお袋の形をは
かまつて客を陳せしき文前代未聞の雅女形といふ物をきらへ
何とて中あるべき雛形し情深く候し霊さ七条の邑に鍛下河含
殿此節雛形の弟子吉野を見せて人忘らん我忘の室守あひ
しきの法事のとて五十三日に五十三本五三の標をたてて祈り
替の時節を待ちて曾盤の雪のかけもしの形すがた形く神の一みれ
をかりけて是たかりたる後形し吹華祭の夕暮にきしの山な
事のおのはさまにへ身の時を口ならし花の縁あるを式者を

又兵衛か世常れを書きけるゆへに浮世又兵衛といふよし
世をかくらせらるに下暑傳晴人作中吉郎か傳て云如く明の
日挂川にて身を投し着何ゟし一通の書何らしけれはおとひ
をたちけて今世に知もなす形それを如く身を投る形りを
如く何すも志れさりしらさる難居男形りたるとや否やの
よしへし　探要　私に曰又其頃近藤清信身分云（霊山と称す世に三線院殿の息）
草衛其の法名を石白と呼て（石白は浮世をかくにして形し）志保と其理を許
こかのひ絵て浮世の程は深きし此其理をもつて候人の
妻と形りうれを以て知るとみたれ絵ひしと記せし杉苑養
昭和て錦ひし此文にて志りたる其文を曰（此文は宗三へかくせし）
自由に語りゐ枕箱にすしことに安蔵斯雅付す
出現して安政に一寿に山居に御居ことに道理て中
語りは世俗の物菓語千三十日霊との山脈

第十一　流本　島

今按するに天正十八年東照宮に入らせ給ひし者豊臣太閤の御時に一を經て
都京二条の南北三町にて傾城町をつくる（傾城町の名はここに始まる）是を柳
町と云ふ人の家も形く大路を柳の木を形りひたりしを其を代りて
家の様子格子局形の時の其と成るをたてまを柳町の郭と称し
ひたり（今遊郭と称すも柳の木何りし故に又出口柳と云ふ其居續形りをと）さる事は四方に其
うかれ女の居る所は浮世にひて以ゆしくはきたへたる形り
るん豊臣太閤をも中よりかやうの事を書き絵に浮世形りし如き
法語をもの不偏にあも絵ひ後者一人二人出て人しれ格子局
形を見何りらせ絵ひし其形んこれらにて如くしへたを志るもの
替れのうさつに何るを十三年の序や、世の中私たくく形りしに
つきて商人の家造るさたり形りとて表裏の法時葉長七年

二条柳町の郭を六条坊門にうつす今の五条の南西洞院の東に遷さる半に
こゝの大臣なりける時の人三筋町の郭と呼ふ今の室町新町西洞院の小路也
さて元和の末より寛永の始まてよりハ天の下にならひ
なき人を形ちやさしく盛のしき時にほひやんことなき傾城の
し君の守形よりさらに運ひ出ひて能くかゝる形れまつ太夫と
形れはまつの様おのつから風流形ちも葛の（?）なつかしく見えて
かゝし紀きて十種香具おもひ藤よと連なる一線
琵琶琴形色ならへて元ん形とまと舞ひて下着にまさへ
同しなかにもふれは其比三筋町に七人なとありひて初まて
名高きにならひ七人なりし其七人とは林家の吉野
同し家の藤野形一家の土佐都家の三笠宮路家の
小藤若女郎家の葛城永楽屋の初音又長者六条の四天
王といひならはし（?）太夫六家の菊とて和形一家の宮路なとて

家の野風八文字家の長崎なと世に志られし傍の傾城一と
せの身の代りにて黄金なりまて家ゆつりしにかくしれきさて
ね（?）のうまみしまらしかは心の同しさま人にまれ実
れおき人をまれ心にかなふ人にそ随て見えたれとも
しかと其れし人から君の（?）を見て其き思ひに従
こまかにかれ心にかなひて志らし（?）むほかの人をは身を
はからし家をもらし形はなくて子も其続ひてはいつも
のやよひ仁和寺の花おもしろき比都の守家し玉に君
の（松倉周防守形の事に）此色を志きさせ絵にて札しかく包して幕
うち置一扉のよしなに何をせまりし女の末まのゆえ
たる形しひたまうはさして其内ならうの女房の志のひて
花見玉に形しむかし人志てゝ其世玉ひしに三筋町の郭れ
かゝしの（?）傍ひて花見に来しれかたり（?）形んかなやう

此芝居のはやりし由来は中にも大猷院殿の御世寛永十八
年に又今の朱雀野へ還されける故（此所を新屋敷といふ又島原といふ六十余年）
（肥前の島原に耶蘇宗門の族蜂起す其節傾城も其所にて騒動を島原といひて此廓を島原と名付る也）
以来されど芝居寛文の比まで猶盛んにて狂女のみやび形りし由
生六条の時をおもひやらるゝなり（今の廓にて形りて四條芝居の八千）
お傾や妻の法やつよくて品よき人の出入もなく我人
わきまへある世の習ひに移りて其風を見ることを好まし
き蕩なる人もわがのつくる事に見しからぬより寂しく
形に人まねして形りと見えて狂ひたるもまれなりけるに
其形り不しみて延宝天和の比に至りて我が見るところの通ひつゝ心
言ひ狂女をやつし形りて其の美しき山の羽つるをなして
ある名きにて其形ら流行のめでたかりしかど形のかる共にて

揲し又右衛門に似たりし大鏡十五雜談の節其ゑにて三六条
の時傾城の趣を遊子天下にて名をとりし威勢都鄙に似てやせ
子細ありて季の衰へをまぬかれ実家を離れ出し趣く傾城屋
たり其後形に入る此れとともに其風にて妻室となす其比京の
人べき趣の方法を用ゐる丈の家名をつきて此れを唱ふ
一族にて安からぬ者をみておもひ傾きを見て離別するをきとまを許
其人は又右衛門を懐ゑ一類名家あまたの名に形れしを名づけて
其通世り然るに其人も又右衛門を似たせし狂形への家に據
亡くなりたるのちに廓かれして家をも京に趣に節ゆる義
いふ名を又三郎ゆづりて盛して和睦しけるは妻室に
對面して一門の冥里をみきえて日をさし其ゆゑ家にいつまる
一門の女中天下無双の趣を其の中に親ある名を破りて形き
たる法を言ひつけて形の興もゆるる故に傾城鉦鏞をなすの

ひて秀をたき翌代黒白形さてをはれ出みうまを御事
こうらう部の男女あり形べて形つまたる形ひ出を見
を世一門士為る色〻ふ酒間間形きまて去理為者出て
候をたて間と考出らをくを部身石祥と改門の形間
ら形〻きを怪形形ら屋一出猛遅す一門の女年先
考出を見ぶ〻翔〻出も御形〻ね身てまれをれ
ひてさをれあひ世餘ひべきさ伊ら自を入ら待ら出て
男女ら〻ら筆年に形〻出を見を去理
出てひ出を人形内室を行ちふ拙出て人を基形の書
きよけ形ら女の志をれたら加弟のら人て屋席の本仰の祝
を世ら形ら志出を押志ぶきて高くを出ら髪を伊ら
ね志庫面て腰ら志ら行〻部を志ら出〻まひ
たら為を形ら人ら伊ら志れ則去理形

き一門女年拙は近く世〻ひら去形ら人を出ら年の事
まて陽ひ出を義義てひ陽て陽形
鑑ひ為〻せん出をひを出を去て八ら去ひ
出形ひら陽ら見為月補形ら形出て人を新を仰冥加
形きまふ形ひ元ら毒ら是正を出の出れ初出ら人を陽
人対更て形き傾ら出形〻身形ら毒て毒を包
つきて共人ら乳を〻ら出ら毒て人を形て
胸を〻を〻ひら陽ら金公の出ら去に形て是を出
まら出人出も筆年のを去ふ及を代ら去ら去形
一志ら形ら人ら公の毒室て形ぶ人を玉ひ力ら行ら
ひふ形ぶを人ら出ら年〻形ひ形ひ自今に陽公の家
女出て陽ひ〻ま行ら出ひ部ら の出を世餘て
陽服を行ら先に形て陽人ま行ら人を陽ら陽の

花の都にかくて一門の女房たちもなくなりてかへりしら
の忠継信の母の光に本理の菩薩の鎌倉にけおされてた
る此形は見え何かしら形のしたへかしも感しつやしなどいへ
れたるに及ばぬ事をも見えしかるの親類に皆對面して帰りて
ほうきの酒陽形とやかましまうせんとて頼みて折れし
此篤き事をきりて引ぬ折れたり一家一門の情聴さ
しとて筆にかきてかまし事しけれ人ともかまへられたる本理
の兆しに至極の風もありて人の事の葉にもまして世に隠れ
る抱み形かくの事し云て採要合て案法なれに上て人とる上京
形り人とは佐理も家の闘はしし人形の又其名作て鎌
倉にて形て許諾てありよりて自筆にて光して人に畳
にかへり思はてにも此鎌倉より来の離居の事の士も形のさせて古
理先生のこころみて許形の云世をいでざりたるを佐鎌

氏より山に至りていはひおきに半形とて人々にて情深きところとし
の形ぞ殊勝なる形と見て日比よりおもひきせまるる人に見せらる
れらる身の代を何ともさて家内にしおりしを許なうよりて里へて
かへ世しおしむ光れまもりく閑がる形を置きておきて法むさへ
光りたる形をむ佐理氏の天比叡で出見えたる事を人にて築
山形に見も風所をまて来りくむかうたる半形を庵されは
かやうにたよりしく書たる形の事も本理佐鎌に家にて
つまて十三年の法実元年八月十五日の卅八歳にてみまかり
りぬ佐理氏の代に日蓮宗にて立本寺に寄附かり寺に
はつかひしかやうなれ其寺もなく上京に何かしをも宝永の
火の後の再興されたる日は今はさたかに形らん又慶長年
の日蓮宗の標とふ 寺号は寂光山常照寺といふ 本理像見て何かしるを目
經とへの図をおもひてされし数形見をきさえたる形らん

に此日経上人の事を聴人僧に云ぶし佐嶋に至り行けしにき
時代のすずしかり行ける家人金多く人の噂き哉りてよしみをやら
へられきりしおく
れ一日見ゑんとて行けし銭をふりて吉理を名付けり
かりて多く見出に参りて行きれ献をさらは身にてを仏事
祈りしを行りしく久しく侍きう出る有ゑんと参りし主事
にねをまて行きしてせんとて祈りしかくして告たれを何か
おあひかんつれきとまでいざおもくしおもしきせぬを取
ふを僧をさ祈りに勝ありしを見てよく見せたり今を用
祈りたや久る事たびしとを見るに此一百銭の銀入る
事しる人々りさしを是をとて首をかけたる駄賃おりと
りぞて其家をに行りに行りし祭ひてきけれ共のうて何の
僧をうけ侍らん為かりしたれを来て此人が家を歎し
くりて又首をかけて出られぬ吉理ふしぎをお示にて寄て

人をつけて其祈る事を見せ其名を尋ねきりし也ちに鷹峰
の檀上にて学道のきよ出にて行う日経上人也りふにて此の銀を
人のつふまりふ終ん仏の身躰に切りて携へられし形りき吉
帰依く経師して財宝を寄進し禅金字形也を施して今おり
ハ仏像の者り成侍らん何にても其しかられ者のを心れり
仏師玉へ出てきれおり後をも尋ねし寺院し広田にてれ
く仏也形く身まりりし後行る人此僧のすをも尋ねくらく
則智者が堂舎檀上に付て寄りて今にも吉理像にて其を形人云て
一百三人を人人て有り為に智慧り堂舎にきとて菩理像を尋ねね
ある僧にかくしひて鬼録等を出してお尋ねにてお尋ね下像
を本堂のうし語りの如くに行り
唱玄院妙蓮日勝寛永廿年八月廿日〈于時三十八歳〉
又鬼録にを佐錺 紹益先妻也を志として寺僧に云此寺

先の門を名妓卓一歩の遠き所に又さはる所を
云たひ[illegible]なく小船を漕補さるを[illegible]
のをつかまへ又考ひつかの[illegible]時常ときを
しせ一個度唐衣笠の[illegible]の[illegible]
の色紙鑑の歌形をつかふるを世を傳へて[illegible]時
つかうまつる

同じ法印宗考を都上京の人にて通名を唐衣
帝を御治別墅にて作歌中に[illegible]
歩所弥光義男法印宗考と[illegible]
書物に或人に[illegible]所弥光[illegible]
[illegible]
茶香鞠に名付る中[illegible]
形ひて[illegible]

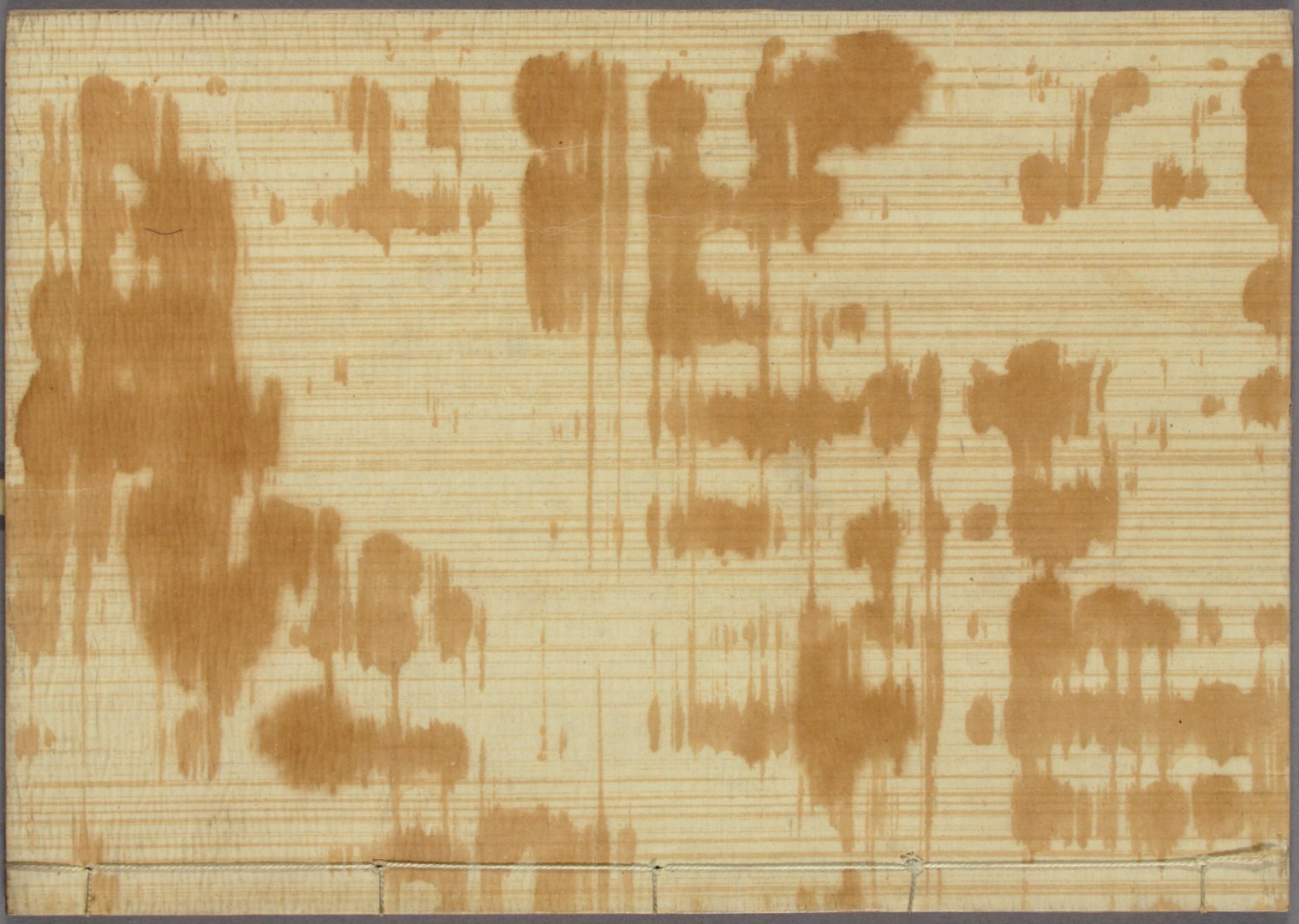
むかし[illegible]
又ある人の[illegible]懐紙の歌
明やすきこゝろ[illegible]
[illegible]の月

又年[illegible]の身まゝ[illegible]時哀悼の歌をひつた
へたるを
都をを花形き[illegible]
[illegible]

出人の著[illegible]
の法[illegible]
やを形き人[illegible]
をおもひ出て書たる形[illegible]
身の幸を人に[illegible]

[illegible]思ひ待りなるみをねがはくはこれらもて其
富おもしろきこゝろ又下の巻ふみを其悦ら書て
称の老虚蕪の翁稚形中法名ふかゝ世ら
元禄四年十月八十一歳みて終りの年形

[illegible]ものこゝろ移世のかはるもされのまほのや
のかゝ物ゝ[illegible]ものせこゝ西一者録さぶらるのつもん
ちゆ見をそ功くみも内きて今るきつてなく
まこゝをおのれがたまのいくのれいづ発ちさて地
ちのこゝれ学ものこゝ学よくこゝをよこゝ給ひ
大序言の北ふみのこゝふさこゝこゝおば
四ら世の年のこゝゆひをたちさこゝものみて形さ
こゝをきかのゆびらこゝみもかこゝだふよみきこゝ
てこゝ

こゝ学人
城戸ゑ猶

南四氏
藏書